平中「ありはてぬ」詠受容に見る女人の生

玉田沙織

はじめに

日本の古典文学史上、先行作品、とくに和歌の積極的な受容は、創作の大きな原動力となった。本稿では、その一例として『古今和歌集』にも収められている平貞文の歌を取り上げ、平安時代から室町時代にかけての、女性をめぐる特徴的な受容を明らかにしていく。

一　『古今和歌集』平中詠の表現性と流布状況

『古今和歌集』雑下部には、次のような和歌が収められている。九六五番歌である。

（つかさとけて侍りける時よめる　平さだふん）
有りはてぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくおもはずもがな[1]

当該歌は平貞文（？～九二三）の作であり、詞書によれば、前歌「うき世にはかどさせりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする」と共に世俗での官途の不遇を嘆くものである。「有りはてぬいのち」とは限りある命を言い、「うきこと」とは直接的には解官に起因する憂愁の思いを指すのであろう。

しかしながら、ひとたび詞書を取り去れば、嘆きの内容を不遇感に限定する要素は無くなる。とくに、「うきこと」という表現は抽象的であり、当該歌が様々な嘆きを託す器たりうることを保証している。当該歌はまた、有限の命を見つめる無常観に立って現世の憂いを嘆ずるために、普遍性を有し、人々の共感を得やすい表現になっているとも言える。

作者平貞文は桓武天皇の玄孫で、「平中（仲）」と通称される。『古今和歌集』の九首以下、勅撰集に一三首収められている勅撰歌人であり、家集は伝存しないが、そ

の風流を求めた生き方は、歌物語『平中物語』に作品化されている。また、複数の滑稽譚が今に残り、文学史上、人間味溢れる歌人として、一定の知名度を有していたことが分かる。

当該歌については、『古今和歌集』諸伝本のうち、元永本・筋切の詞書が小異ある説明を有しており[2]、元永年間（一一一八～九）以前には、二首の歌が別途物語的な状況を伴って伝わっていたことが推測されるが、今は残らない。『平中物語』も前歌「うき世には」のみを有するため、文学史上の平中「ありはてぬ」詠は、前掲諸本の形で、『古今和歌集』歌として認識されていったようである。

二　『大和物語』における受容

『古今和歌集』の成立後、程なくして一点の受容作品が生まれた。天暦五、六年（九五一、二）頃に大部分が成立したとされる『大和物語』の第百四十二段である。ここでは、和歌が作者名の平中および詠歌状況から切り離されて単独で取り込まれているため、出典が『古今和歌集』にあるか、家集の類にあるのかは不明である。内容は次のようなものである。流布本系統の最善本とされる為家本[3]によって掲げる。

故御息所の御姉、おほいご[4]にあたりたまひけるなむ、いとらうらうじく、歌詠みたまふことも、妹たち御息所よりも勝りてなむいますかりける。稚き時に女親は失せたまひにけり。継母の手に掛かりていますければ、心にものの叶はぬ時もありけり。さて詠みたまひける。

あり果てぬ命待つ間の程ばかり憂きこと繁く嘆かずもがな[5]

となむ詠みたまひける。梅の花を折りてまた、

かかる香の秋も変はらず匂ひせば春恋してふ眺めせましや

と詠みたまひける。いと由づきておかしくいますかりければ、婚ばふ人もいと多かりけれど、返事もせざりけり。「女と言ふもの、つひにかくて果てたまふべきにもあらず。時々は返事したまへ」と親も継母も言ひければ、責められて、かく言ひやりける。

思へどもかひなかるべみ忍ぶればつれなきともや人の見るらむ

とばかり言ひやりて、ものもいは言はざりけり。かく言ひける心ばへは、親など、「男逢はせむ」と言ひけれど、「一生に男せで止みなむ」と言ふことを、世とともに言ひける。さ言ひけるもしるく、男もせ

で廿九にてなむ失せたまひにける。[6]

本話は、夫を持つことを拒んで二九歳で亡くなった教養ある貴族女性の歌話であり、継子いじめの系譜を引いている。才気あり、和歌に秀でた故御息所の姉は、幼い頃に母を亡くして継母に育てられ、それゆえに、思いの叶わないこともあったという。彼女は死ぬまでの短い間ぐらい、できればあまり辛さを味わうことなく、嘆きも経験せずに過ごしたいと願った。また、梅を手折っては、秋に梅香に焦がれることによせて亡き母を慕った。美しく教養もあったため求婚者も多く、父も継母も、女性たるもの未婚のまま終わるべきではない、時々は返事もするようにと責めたため、男には、返事をしないのは忍んでいるからだが、きっと、気がないからだ、つれないと思われるだろうとばかり詠みやって、それきりにした。本心としては、一生夫を持たないで終わりたかったのであり、常日頃そう口にしていたとおり、男を通わせることなく二九歳で亡くなったという。

前接の第百四十一段は「世の中心憂し。なほ男せじ」と思いつつも間夫を作り「結婚生活に破れた[7]」筑紫出身の女性の話、後続の第百四十三段は、召人になっていた男の義兄とも関係を持った五条の御の話であり、三章段には「憂し」の語が共通する。ここでは、男女の仲を指す「世の中」における「憂きこと」を主題化した章段が、連鎖的に配置されている。

平中詠と重なるのは一首目である。末句は、本章段では辛さを直接的に表現する語彙「嘆く」となっているものの、ほぼ同一の表現である[8]。前節に述べた流布状況からすれば、歌話そのものの成立時であれ、『大和物語』に摂取されて完成した時点であれ、平中詠はある程度知られていたであろう。『大和物語』の先行研究では、本章段の有する異同を「誤伝であろう」とする立場がある一方で、『古今和歌集』と同一本文を持つ異本系統の本文が本来的で、物語は平中詠による「虚構に基づくもの[9]」とする立場がある。誤伝説については前述のとおり知名度からして疑わしく、異本系統を優位と見る立場にも疑問がある。『大和物語』の時点で行われたか、それ以前であるかは不明だが、あるいは、物語内容に合わせた意図的な改変であろうか。『古今和歌集』においては、男性にとっての「世」の「うきこと」である官途の不遇を嘆いていたものを、『大和物語』においては、章段連鎖も示すように、その「世」を当時の女性にとって大きな意味を持った男女の仲に読み換え、「いのちまつま」における「うきこと」との対し方を問う物語として展開さ

せているのである。

本章段ではもう一点、平中詠に基づき物語世界を広げている箇所がある。姉君が亡くなった、二九歳という年齢である。本稿冒頭にて、平中詠の「有りはてぬいのち」は、限りある命を指すと述べた。第三句ではその寿命が尽きるまでの間「ばかり」と程度の少なさを強調する表現を取るため、寿命までの間が短いと解しうる。それでは、なぜ二九という数字なのか。

史料としては、次のようなものがある。すべて氏女の献上についてのもので、順に七五七年、八〇六年、九二七年に成立したものである。

凡そ諸氏、氏別に女を貢がせよ。皆、年卅以下十三以上を限れ。（『養老令』後宮職員令一八、氏女采女条）

氏之長者、氏中の端正なる女を択びて之を貢ぐ。其十三已上の徒、心神移ひ易く、進退未だ定まらず。宜しく女年卅已上卅已下にして、時に夫無き者を採るべし。（『類聚三代格』四、大同元年一〇月一三日太政官符）

凡そ諸氏、氏女を貢がんには、皆年四十已下三十已上の、時に夫なき者を簡びて解文を造り、親昏ともに署して省に申せ。（『延喜式』中務省）

氏女とは古代前期において各氏から献上された女官であり、采女が郡司郷司の姉妹であったのに対して、社会的立場に制限はなかったようである。大同元年の太政官符からは端正な容姿が求められたことが分かるが、それ以上に重要なのは、対象年齢が三〇歳以上に引き上げられ、その理由に、一三歳以上の者は「心神移ひ易く」として精神的安定の乏しさが挙げられていることである。『大和物語』の成立よりもはるか前ではあるが、この設定は『延喜式』にも引き継がれており、一定の基準となりうるであろう。三〇歳とは、精神的成熟に達する年齢と目されていたのである。[10]

また、時代はやや降り、文学作品中の例として、『源氏物語』の女君の場合も確認しておきたい。

もののはえばえしさ作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや。いといまめかしくなり変れる御気色のすさまじさも、見ならはずなりにけることなれば、いとなむ苦しき。（夕霧巻）

女二宮と夕霧の仲を疑う雲居雁の言である。自らを「古る」と形容するが、この時の雲居雁は三一歳である。年齢感覚を論じる際にまま引き合いに出される『韓非子』にも「丈夫年五十而好色未解也。婦人三十而美色衰矣」（備内篇）とある。賀を行うのは四〇歳以後であるが、三〇歳は女性の老いの始まり、つまり身体的成熟の臨界点とも考えられていたのではないか。[11]

姉君が二九歳で亡くなったとの設定は、直接的には第三句「ばかり」を重視した潤色の結果であり、具体的な年齢設定は、その達観のとおりに成熟を待たずして、そして願いどおりに男を通わせないまま、「うきこと」を味わうことなく一生を終えたことを意味する。今井源衛氏は「貴族の女性に主体的な生き方がほとんど許されていなかった当代に於いて、自ら独身を貫こうという異常な決意を示す女性は稀であり、又それを実現するというのはさらに異常であろう」と「主題の特異な性格」を指摘するが、[12] 稿者は、姉君が後掲のような他の多くの女性歌人とは違い、その男女関係を拒否する態度を早い段階で固めていた点を重視したい。『大和物語』の姉君は、平中詠を読み替え、また潤色することで、早くから人生を達観して男性を拒み、ついにはその意志を貫いた女性として語られている。

三　平安期女性の家集における受容

「うきこと」を男女の仲のそれと解して受容する感性は、ひとり『大和物語』に限ったものではない。

ながからぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくなげかずもがな

（冷泉家蔵平安中期写本『重之女集』一一五）

おほかたにあるふみども、殿の御物忌おまへなるほどはえみぬに、そひたるふみばこのうはつけの心もとなさに、はしをあけてみるまゝにこれにこそなぐさまれけれおもかげにみゆるにはにぬ（本ノマヽ）

ようさりまかりいでて、ふみみるに、とのなりけるものをまづあけて、いみじういはれても、みづからのみ

ありはてぬいのちまつまの程ばかりいとかく物をおもはずもがな

（榊原家蔵『和泉式部続集』六四六・六四七）

いずれも、女性の家集の掉尾を飾る和歌に、平中詠の転用が見られる。重之女の生没年は不明であるが、父源重

之は長保年間（九九九～一〇〇四）に没したとされるため、『大和物語』成立以降の詠であろうか。第五句「なげかず」は『大和物語』に同じである。当該歌は百首歌を主体とした家集末尾歌の一首であるため後人による追加の可能性も強く、これを持たない伝本もある。[13] しかし、記入者が誰であれ、家集の閉じ目に、あたかも歌に語らせた重之女の人生を総括するかのように位置せしめられている点は留意すべきであろう。そしてこのような営みは、やや降って『和泉式部続集』にも見えるのである。重之女と同様に初期百首の歌い手でもある和泉式部（九七〇年代―一〇二七以後）は、恋人に叱責され、平中詠を一部改変した歌を心の内に詠じたと書き、家集を閉じる。「物をおも」う内容は何かと言えば、この恋人とのことであろう。和泉式部には、他にも「ありはてぬわが身とならば忘じといひしほどへぬ我身ともがな」（榊原家蔵『和泉式部続集』五九四「廿日、今日のほどはとおもふにも、むかしあはれにて」）と平中詠を踏まえて夜離れを嘆く歌作があり、平中が官途の不遇で歌い上げた嘆きを、男女の仲の文脈で引き受けて思いを託すことは、一度の思いつきではなかった。

末尾歌ではないが、平安期和歌には、他にも赤染衛門（九六〇以前―一〇四一以後）の次のような歌がある。摂津国を取りあげられた当時の恋人、大江為基（生没年未詳）とのやりとりである。

亦ほどへて、あれより
ありはてぬ身だに心にかなはずは思ひの外の世にもふる哉

とあるを見るに、みかはのかみなりしほどのありさま、ちゝの左大弁のおぼえのほどなどおもひいづるに、いとあはれにて
心にもかなはぬ事はありやせし思ひのほかのよこそつらけれ　（榊原家蔵『赤染衛門集』三五・三六）

ここでの為基は心に身を対置させて『古今和歌集』の平中よろしく不遇を嘆き、対する赤染衛門は為基の父・左大弁斉光存命時の為基の幸せを持ち出し、思い通りにならないこの世は辛いものと同調している。そしてこれにはさらに裏に別の意を見る解釈がある。すなわち、贈答歌の「世」に男女の仲の意を認めて思い通りにならない二人の仲を歌うと解釈し、返歌の赤染が、自分は、為基の思い通りの世の外にいて辛い「世」を過ごしていたと恨むというものである。[14] 贈歌の「世」に二重の意味を認めるのは躊躇われるが、返歌については「（ありやせし…）

つらけれ」と自身の過去の体験を嘆じており、首肯される。当該贈答は、為基が平中詠を受容してみずからの境遇を嘆いたのに対して、赤染は『大和物語』に同じく「世」の意味を読み替えて為基のつれなさを嘆いてみせ、為基に寄り添う心を示している。

この他、平中詠は、九世紀から一〇世紀を生き、宇多天皇を始めとして多くの貴顕の寵愛を受けた伊勢の家集にも重出している。『伊勢集』に平中との贈答も含まれることからすれば、和歌が集積される過程での混入が想定される。配置上は恋愛贈答における女の歌となっているため、いかにも恋多き伊勢の歌らしいと信じられ、置かれたのであろうか。[15]

このように、平中詠の「うきこと」を男女の仲のそれに読み替えて女性の人生を嘆く受容は、『大和物語』のみならず、平安期女性歌人にも複数見いだされる。

四　『風につれなき』における受容

「うきこと」の読み換えとそれによる女性の生き方への問いは、鎌倉時代物語『風につれなき』にも見られる。そしてここでの主人公は、『大和物語』と同様に、男性を拒むことを選択している。

当該作品は首部二巻が現存するばかりだが、『風葉和歌集』への入集歌数が四六首に達し、『源氏物語』『うつほ物語』『狭衣物語』に次ぐため、ある程度の長編であったと推測されている。その中で主人公と目されるのが、『風葉和歌集』において「風につれなきの女院」と称される、入道関白太政大臣の次女・小姫君である。出生時に「また同じさまなる女君の、いま少しこの世のものともなく光を放つやうなる」様で生まれ、産褥で亡くなる母に「この姫君ゆめゆめおろかにし給ふな。夢にもさ見えしなり」と遺言された姫君は、誕生時にはやばやと主人公としての資格を付与されている（上巻［一］）。成長後も、「この姫君は、御心ざまもまだきよりいとすぐれてぞおはすべき。おほどかにらうたげなるうはべは、女御の君の同じさまに見え給へれど、これはいま少しはるけどころありて、そそしき[16]方も添ひ給へり」と、姉君に比べて明るさなどの美質が勝っていたという（下巻［一〇］）。姉君はやがて入内し、帝寵を得て中宮となり、さらには第一皇子を生むが、母と同様に出産で亡くなる。そして亡くなる際に小姫君に向かって、「たとひ御身には憂きこと、厭はしく思すこと出で来とも、この御様心やすく見おききこえ給はんまでは、目放ち奉り給ふな。思ふやう侍り、ゆめゆめ違へ給ふな」と母同様に子供を託して亡くなっていく（下巻［二］）。姉の言葉にある

「憂きこと」とは、かねてよりの帝の懸想が招く事態を指すのであろう。かつて、姉妹を垣間見た帝は瞬く間に小姫君に心を移し、その居室に忍び入って小姫君を怯えさせていた。

美しく育った小姫君は、父の猶子となった美貌の従兄弟・権中納言（のちの太政大臣）を始めとし、世の男性の関心を一身に集めるが、本稿で注目したいのは、このような事態を受けて父入道が口にする言葉である。彼は、後見を託した弟（権中納言の父・関白）までもが、入内を勧めつつも彼女に魅了されている様子を察して次のように述べる。

すべて世の人に似ず、この世のいと憂く、かりそめにおぼえ侍りし身にて、ただ命待つ間はさて過ぐして。よかりし人の子産むも、憂きことと見給ひてしかば。さるべき人の筋にもあらん。さのみ憂き目を見んに、心憂き命のめぐらひて聞かむほどは、ただ心乱さで過ぐせとなむ思ひおき侍りし（下巻［一二二］）

入道は、娘には未婚のまま過ごさせたいと述べ、その際に平中詠を引いている。帝寵と中宮位を得た姉娘が、第一皇子の母という栄誉を手に入れながらその出産で亡くなったことを引き合いに出し、女性として最高とも思える幸せもやはり「憂きこと」だったという。ここでの入道は、『大和物語』第百四十二段の美貌の才媛が「嘆かずもがな」と選んだような、心乱さず生きる道を望ましいものと考えている。[17] 入道はこの直後に「女の一人過ぐす、いとあはあはしく人に欺かれぬべきものと見侍りしを、かまへてよきにはぐくませ給へ」と独り身ゆえの頼りの無さを心配する。『大和物語』を知る読者は、女君が叔父関白を始めとしたあまたの男性の関心をいかに逃れて身を処していくのか、命を保つことができるのかという点に興味を抱いたであろうし、知らずとも、前節の平安期の女性たちに共有されていたような、「いのちまつま」の「うきこと」の嘆きといかに対していくのか、興味を抱いたであろう。

当該物語は、現在では巻三以下が伝存しない。したがって、この言葉が小姫君に与えた影響は不明であるが、この美しい女君は実際に男性を拒み通し、父の望む道を歩んだようである。『風葉和歌集』の作者名表記によれば、彼女は最後には先述の「風につれなきの女院」となっている。小木喬氏が論じるように、仮に彼女に懸想をしていた帝に入内していれば、「…吉野院の女院」と称されたであろう。[18] また、『風葉和歌集』入集歌で見る限り、

恋人関係の成立を想像させるものはないため、森下純昭氏の述べる「結婚を拒否し通して女院となる女性」との定義には首肯される。[19]

『風につれなき』の女院は、『大和物語』の姉君に同じく、帝という男性を拒み通す。「世」を生き続ける道が与えられた点は姉君とは対照的であるが、平中詠「うきこと」を女性の立場から読み換えているという意味で、やはり平中詠に導かれて物語が展開する作品と言える。[20]

五　『新蔵人』絵巻における受容

室町時代中後期の成立とされる[21]御伽草子絵巻『新蔵人物語』（以下『新蔵人』絵巻）もまた、平中詠を受容している。この物語は、諸大夫層四人兄妹の末子・三君の人生の軌跡を性自認に焦点化して語るものと言えるが、ここでは物語の冒頭部で平中詠が引かれる。

一　何と言ひせせかみてもかひなし。ただ我が心のままになり行くものなれば、「ともかくもあれよ」と申すはいかに。（殿）

二　我もただ、さ候ふよ。よく仰せられたり。（上）

三　異様に案じ候ふべき身にても候はばこそ。姫たちのことは知らず。〈蔵人〉

四　何事も詮なし。「あり果てぬ世」なれば、仏にならんことのみぞ思ふ。（大君）

五　「命待つ間」もげにまたあり。ただ面白くてこそ、過ぐしたく候へ。（中君）

六　あこはただ、男になりてぞ走り歩きたき。（三君）

七　美しき御髪ゆりかけて、御幸ひ引かせおはしませ。（侍従）

〔上、殿、傅殿、新蔵人、蔵人、大君、中君、侍従〕（第一段・画中詞）

大君が「ありはてぬ」ことを重く見て成仏を願うのに対し、中君は「命待つ間」を重視して現世の楽しみを追求したいと、対照的な意見を述べる。この両者の発言には、彼女たちの階層としては、ごく妥当な女性の願望が二分して示されているのであろう。そして末娘の三君はそのいずれでもなく、男性としての生を望むと型破りな発言をする。他方、父親は、どのように躾けても結局はそれぞれ「心のまま」育つとして、好きに歩ませたいと述べる。中世期の教訓的書物では「心のまゝなるが返〳〵あしき事にて候」「我心のまゝにふるまひ候はんには、いたづらごとにて候」（『めのとの文』）と心に任せた振る

舞いを批判し、「また親もあひそへて、愛子に咎や忘るらむ、後の毒をかへりみず、その子を教へせせがまぬだに不便なるに、…荒涼のことをいひ知らせつれば、…とりどころなき徒者に生ひ立つなり」「かかるもの、たまたま宮仕へを思ひ立つとも、さる振舞をするうへは、心に入るる主もなし」（『十訓抄』七）と親の教導無くして育った者は、出仕しても恩顧を受けることはできないとする。『新蔵人』絵巻は、冒頭の家族の会話をとおして、「心のまま」生きることを許された主人公・三君の身の処し方へと関心をかき立てる設定となっている。[22] とくに、平中詠が対照的な文脈に分けられ、当時の女性の代表的な生き方をそれぞれ担って引歌がなされることからすれば、女性としての生き様を追究する作品において、問題提起のために利用されていると言える。『新蔵人』絵巻は、平安期女性歌人たちが口を閉ざした所から、語り起こすのである。

次段以降、子供達は、望みのまま順調に歩むこととなり、三君は先を行く兄姉の身の振り方を見てその都度自らの進む道を考える。大君の出家と中君の懐妊には「いと羨ましくて候ふ。母は姉の御弟子になれとあれども、…後の世は、すずしく、羨ましくもなし」（第四段・詞書）と思うが、中君の許へ出仕させようとの両親の思惑には「我はこまごまとある宮仕ひえすまじ。…蔵人殿の伽もなしとあるに、男になさせ給へ」（第五段・詞書）と願い、当初の望みに立ち戻り、男性を装う人生を選択する。しかし、新蔵人の名で出仕した後に姉と帝の仲睦まじい様を目の当たりにすると「羨ましの気色や。さらば、女にて参りて、我が身も宮を産みまゐらせて。悔しや」（第七段・画中詞）と思うことになる。その後は帝に親しく仕えるうちに女性であることが露見し、望みどおりに寵愛を蒙り若宮を生むことになるが、姉との軋轢や、他の女性に対する激しい嫉妬から帝に疎まれるというように、女性ならではの「うきこと」を様々に味わい、また『十訓抄』の予言どおり、帝寵を失うことになる。そしてついには「さしも見たからずと言ひし姉の弟子にも今ぞなりて、行ひをもせばや」（第十二段・詞書）と、女性や男性といった性別を超えた身分である出家者となることを決心するのである。当該作品と同様に異性装による性の越境を描く『とりかへばや』『有明の別』『ちごいま』の主人公が、本来の性への回帰により大団円を迎えるのに対し、三君は「越境したまま、さらに彼方へと跳躍した」ことになる。[23]

しかしそのように出家しても性別からは自由になれなかった。人からは「これはさて、尼御前かや、入道のや

うにわたらせ給ひ候ふ」と、完全剃髪をした容姿を男の仏弟子のようだと笑われ、姉は、外部の人間に僧との相住みを疑われたくないとの思いから、「法師はうち被きて居させ給へ」と頭巾で尼らしく装えと言う。それに対する三君の返事は次のようなものであった。

四　諸々のことは実によるとこそ申し候へ。似てこそあるらめ。聞きたくもなや。変成男子とこそ言へ、生きながら変成女子になりたる心地ぞする。

（第十六段・画中詞）

「諸々のことは実による」は仏教用語「諸法実相」を和語化した表現であり、存在するものすべてが真実の姿であるとの意である。[24] ここでの三君は、男や女といった外見にこだわることに異を唱えている。また、「変成女子」とは、「変成男子」すなわち成仏するために女身を変じて男子と成ることのもじりである。ここでの三君は、成仏する修行のために女を装えという発言に、仏の教えとは逆だと難じていることになる。これまでの三君が、男装出仕により男性性を身に備えながらも男にはなりきれなかった事実を思うとき、その言葉は強い説得力を持つ。[25] 装いによっては、女性という本質を変えることはできないというのである。

物語の末尾に至るまで、三君の人生は自分探し、幸せ探しの様相を呈していた。物語の冒頭で女性であることを拒み、「心のまま」生きた末に達した結論が、前出の発言である。この後物語は最終段となり、家族が「定めて一つ蓮に迎へられ給ひけんかし」と結んで終わる。仏の教えをよく学んだ三君は、姉とともに往生して家族をも極楽に引き入れるという願いを叶えたことになる。

『新蔵人』絵巻の三君は、同じく物語である『大和物語』の姉君が成熟を拒否するかのような死により理想を貫いたのとは対照的に生き続け、また、『風につれなき』の女君が生き続けながらも男性を拒みとおす生き方を選んだのとも異なり、最終的には出家入道という「社会的な死」を選びながらも、[26] 生き抜いて男女の愛憎を味わった上で女性の身を脱している。意志のままに男性の生と女性の生を経験した上で性別を超えた身となり、仏教的功徳を積み、見事に望みを叶えたのが『新蔵人』絵巻における女性の人生の引き受け方であり、平中詠受容の形であった。

おわりに

平貞文の『古今和歌集』九六五番歌は貴族社会に広く

知られたと思しく、『大和物語』『重之女集』『和泉式部続集』『赤染衛門集』『伊勢集』に見るように、平安時代半ば頃には、女性がいかに「いのちまつま」を生きるかという命題の下に受容されるようになっていた。『赤染衛門集』の大江為基のように、男性が官途の不遇を嘆く形での受容もあるが、「いのちまつま」を女性が男女関係に悩む時間と捉える認識は、ある程度共有されていたのである。そしてこれは、平中詠の「うきこと」の抽象性が読み換えの余地を残し、一首全体が普遍的な嘆きを詠じていたためである。抽象性は想像力を刺激し、普遍性は共感を呼ぶ。平中詠は、両特徴相俟って様々な展開の糸口となった。

とくに、物語作品における受容にはある共通点があり、前近代女性の生き方を考える際には示唆に富む。成立時期や受容者は大きく異なり、わずか三作品を数えるに過ぎないが、『大和物語』『風につれなき』『新蔵人』絵巻は、結末に差はあれど、いずれも意志を貫く女性を登場させるのである。現実の女人の生は「世」という男女関係に大きく影響されていたのであり、実現は困難を伴ったであろう。女性たちがありたき姿を描き出す媒となったのが、平貞文の歌だったのではないか。

注

(1) 異文、高野切や清輔本系諸本の第三句に「ほどだにも」。また、基俊本系諸本の末句は、後掲『大和物語』の影響を受けてか、傍記「なげかずも」とある。

(2) 元永本「つかさとけて侍りける時、人の国へまかりなんといでたちけるに、おやのせちにとゞめ侍りければ、とゞまりてよめる」。筋切、現存分ほぼ同。

(3) 柿本奨・阿部俊子氏など。

(4) 異本系統に異文有り。異本系統は、高橋正治氏のいわゆる第二・三系統ともに「御あねいせのかみのむすめにおひ給ひけるなん」(御巫本)のように、姉に伊勢守娘を当てる。注6異文に同じく第百四十三段伊勢守との繋がりが問題となる。伊勢守娘で御息所になった人物としては、宇多から村上帝の四代を通じては、歌人伊勢しか該当しない点にも留意すべきであろう(今井源衛『大和物語評釈』下、二〇〇〇年、笠間書院、当該章段注。初出一九六五年六月)。今井氏は、当該歌が西本願寺本と群書類従本の『伊勢集』にも見えることから、『伊勢集』に異文の淵源を求める。第百四十九段末尾にも見える異本系統の本文展開の問題であり、今は措く。

(5) 異本系統はいずれも『古今和歌集』に同じく「思はずもがな」。

(6) 異本系統と流布本系統の一部に異文有り。異本系統は、高橋正治氏のいわゆる第二・三系統では「この歌どもみなふる事になりにけり」(御巫本)のように古伝承を主張する。流布本系統でも為氏・大永本が類似する本文を有する。次段末尾の付言「今はみな古歌になりたることなり」と類似する。

(7) 柿本奨『大和物語の注釈と研究』(一九八一年、武蔵野書院、第百四十二段注)。

(8)『古今和歌集』でも、基俊本系統の末句には『大和物語』と同文の傍記「なげかずも」がある。

(9) 順に、注7柿本注釈書当該章段注、注4今井注釈書当該章段注。

(10) 時代は降るが、『乳母の草紙』には、「いかにも、三十路ばかりの齢より、麗しく物は思ひ知る物にて候へば」とあり、同作品の「新日本古典文学大系」注では天正一七年(一五九〇)奥書の『大上臈御名之事』に三〇歳で髪の結節点を変えたことを記す。

(11) 紫上もまた、女三宮という新たな女性の出現に不安を覚えていた。そして朧月夜との仲まで復活した源氏に対し「いまめかしくもなり返る御ありさまかな」(若菜上巻)と述べている。当時の紫上も三一歳である。むろん個人差はあったであろうし、いわゆる「床去り」の年齢とまでは言えない。工藤重矩氏の述べるように、制度としての「床去り」はそもそも認めにくく、その節目を三〇歳とする根拠にも乏しい(『平安朝の結婚制度と文学』一九九四年、風間書房)。反証としては、三三歳で結婚した菅原孝標女や、四〇歳を超えてからも出産した摂関家の女性達が挙げられる(服藤早苗「冬　至福の時をめざして」『平安期　女性のライフサイクル』二〇〇九年、吉川弘文館)。

(12) 注4今井注釈書当該章段注。

(13) 書陵部蔵乙本(五〇一・五三)。本稿依拠本の冷泉家本は一一世紀後半の書写と見られ、承空本とその系統の甲本との親疎関係から言えば、当該歌を持たない乙本に近い(田中登「解題　重之女集」『平安私家集』一、一九九三年、朝日新聞社)。当該歌は、ごく早い段落での入集が推測される。

(14) 武田早苗『赤染衛門集』(二〇〇〇年、明治書院、当該贈答注)。

(15)『伊勢集』主要伝本系統のうち当該歌を脱するのは、最後に成立したとされる歌仙家集本のみであり、早い段階での混入であったようだ。なお、異本系『大和物語』第百四十二段は、『伊勢集』と関わって注4に既述したような問題を抱える。

(16) 原文「そゝしき」。丹鶴叢書版本には傍注「本ニ本」。森下純昭氏(『木幡の時雨　風につれなき』一九九七年、笠間書院)も妹尾好信氏(『訳注『風につれなき物語』(上)」

『広島文教女子大学紀要』三一、一九九六年一二月）も語義不明とする。

（17）この引歌の典拠は『古今和歌集』でよいであろうが、「憂きこと」を男女の仲のそれに読み換えた際に、結婚拒否の結論を導く意味では『大和物語』と志向性を同じくするものである。

（18）「第二篇八　風につれなき物語」（『鎌倉時代物語の研究』一九八四年、有精堂）。

（19）注16森下注釈書二一一頁。未婚の女院の設定は、小木氏の述べるように姉の遺児・堀河院の準母としての処遇であろう。歴史上は、内親王以外の例はなく「物語的特殊例」と考えられるものの（同前森下氏）、二条帝準母八条院暲子以降後嵯峨帝以前に集中して実在した。

（20）森下氏は女君の先例として『竹取物語』かぐや姫、『源氏物語』朝顔君・宇治大君、『狭衣物語』源氏宮を挙げるが（注16森下注釈書二一一頁）、同じく臣下として不婚を貫いた『大和物語』第百四十二段の姉君も加えられるであろう。

（21）江口啓子「解説」（『室町時代の少女革命―『新蔵人』絵巻の世界―』二〇一四年、笠間書院）。

（22）注21注釈書所載拙稿「『新蔵人』絵巻冒頭部の仕掛け―文化継承装置としての引歌―」。

（23）阿部泰郎「性の越境」（『女の領域・男の領域』二〇〇三年、岩波書店、二二一頁）。

（24）注21注釈書第十六段注。

（25）阿部泰郎監修『名古屋大学比較人文学研究年報別冊二〇〇五年『新蔵人物語』絵巻の研究』（二〇〇六年、名古屋大学文学研究科比較人文学研究室、第十六段江口啓子補注）。

（26）注23阿部論文二二〇頁。

※引用本文は、『大和物語』は為家本が高橋正治『大和物語の研究　系統別本文篇』上（一九六九年、臨川書店）、その他は本多伊平『大和物語本文の研究』（一九八〇年、笠間書院）、『古今和歌集』元永本は「日本名筆選」、その他は久曾神昇『古今和歌集成立論』（一九六〇・六一年、風間書房）、『重之女集』は「冷泉家蔵時雨亭叢書」、その他私家集は「私家集大成」、その他和歌と歌番号は『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2、『乳母の草紙』は「新日本古典文学大系」、『源氏物語』『十訓抄』は「新編日本古典文学全集」、『風につれなき』は「中世王朝物語全集」、『令集解（養老令）』『類聚三代格』は「新訂増補国史大系」、『延喜式』は「訳注日本史料」、『韓非子』は「新釈漢文大系」、『新蔵人』絵巻は『室町時代の少女革命―『新蔵人』絵巻の世界―』（二〇一四年、笠間書院）、『めのとの文』は内閣文庫本影印による。一部校訂を加え、表記を改めた。

（たまだ・さおり／名古屋学院大学任期制講師）